

双葉通信【第 267 回】(被災地を行く№34) “ふくしまの切り捨ては許さない”

2026 年 1 月 20 日 上 田 勉

大熊の暮らし、後世に 国有形文化財「渡部家住宅」 餅つきやカルタで交流 /

「東京電力福島第 1 原発事故による避難指示が 2019 年 4 月に解除された大熊町大川原地区で、国登録有形文化財の「渡部家住宅」を交流の場として活用する新春餅つき大会が 18 日に開かれた。町内外から約 50 人が参加して大熊のかつての暮らししぶりに思いをはせた。

渡部家住宅は主屋が明治初期に建てられた木造平屋建て約 190 平方メートルの豪農の屋敷。渡部家は農業や養蚕に加えて馬産でも財を成したといい、木造 2 階建ての馬小屋や土蔵など東日本大震災にも耐えた計 5 棟が、馬事文化で栄えた浜通り地方の生活様式を伝えているとして 20 年に国有形文化財に登録された。現在は所有者の渡部雅之さん (61) が避難先から管理している。

大川原地区は大熊町で最初に避難指示が解除されたため、町役場や義務教育学校「学び舎(や) ゆめの森」、商業施設などが集中的に整備された一方で、震災前の建物は多くが解体された。「震災前の営みを伝えたい」と、移住して地方創生イベントを手掛ける谷田川佐和さん (28) らの会社「Oriai」(東京) が委託を受けて、23 年 1 月の餅つき大会を皮切りにイベントなどで活用してきた。

4 年目からは「町里山活用協議会」として町ぐるみでの活用に移行し、この日は町内外からの参加者が最初に敷地内を清掃した。渡部家住宅は防風林「居久根(いぐね)」も特徴で、参加者たちはたまっていた杉などの落ち葉や折れた枝を大量にかき集めた。餅つきでは伝統的な臼ときねで子どもたちも元気よくついた。震災前の大熊の暮らししぶりを後世に伝えるため町民に募集して 19 年に完成した「おおくま・おらほのカルタ」もあり、優勝者には「おおくまふるさと塾」顧問の鎌田清衛さん (83) の本「続 残しておきたい大熊のはなし」が贈られた。馬事文化を継承する NPO 法人「相馬救援隊」による乗馬体験もあった。

学び舎ゆめの森 2 年の佐々田徳夢(らいむ)さん (8) は「カルタは全部知っていたので負けて悔しかった。こんなおうちにちょっとだけ住んでみたい」と笑顔。23 年に帰還して行政区長を務める宗像宗之さん (72) は「こうやって盛り上げてくれて本当にありがたい。子どもの声が響くだけで全然違う」と喜んだ。【錦織祐一】(「毎日新聞」2026/1/20 地方版)

<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/541141> 文化遺産オンライン

渡部家住宅主屋(わたなべけじゅうたくおもや)

【概要】住居建築 / 東北 / 福島県

明治／1868～1882 木造平屋建、瓦葺、建築面積 193 m² 1 棟

福島県双葉郡大熊町大字大川原字南平 275 登録年月日:20210204

登録有形文化財(建造物) 【解説】

大熊町西方の内陸部に位置し、主屋は敷地の北奥に建つ。平屋建、入母屋造。軒はせがい造のもと茅葺で、棟瓦葺とした際に小屋組を改修した。玄関奥をイマ等として上手は二列六室で縁を廻し、下手は土間を板敷に整備。地域に残る大規模な農家主屋として貴重



【渡部家住宅 概観（大熊町）】（2025年2月5日撮影）



【渡部家住宅 主家（おもや）観（大熊町）】（2025年2月5日撮影）